

夏目漱石の「文学の哲学」に関する予備的考察

——精神科学・ロマン主義・有機体論——

木戸浦 豊 和

はじめに——本稿の課題

夏目漱石は『文学論』（大倉書店、明治四〇年五月）序で自身の文学研究の始発の動機が「根本的に文学とは如何なるものぞと云へる問題を解釈」する点にあったと語る。対象の本質を探究する営みが哲学に含まれるとすれば「文学」の「根本」を問う漱石の原理的思考は「文学の哲学」と呼ばれ得る。

本稿は、漱石が「世界を如何に観るべき」という認識の問題を重要な研究課題に掲げていた点に着目し、その哲学的関心の意義を共時的・通時的な思想・文学論などと積極的に交通させることで大局的に問う。具体的に本稿は、同時代の言説としてアンリ・ベルクソンの哲学と、また通時的な思想としてロマン主義の文学論と連絡させることで漱石の理論が根差す歴史的・系譜的位置を探る。

近年『文学論』をはじめとする漱石の理論に改めて注目が集まり、

新たな研究も胎動している。この動向の一隅で本稿は「文学の哲学」に関する予備的考察を推進し、漱石の理論研究に今後の展望を拓く端緒となることを期したい。

一 二つの認識の態度——科学的≡傍観的認識と文学的≡同化的認識

「文学の哲学」を追跡する本稿が最初に取り上げるのは、漱石の理論と認識論との関係である。漱石にとって認識の問題、つまり「世界を如何に観るべき」という問題が切実な課題であったことは「大要」と題された「ノート」が告げている。「大要」は明治三三年（一九〇〇）秋に始まる漱石の英国留学における「文学研究のプログラム」だと考えられているが、その第一項目に「世界ヲ如何ニ観ルベキ」という認識の問題が掲げられているのだ。さらに漱石は明

治三五年三月に義父中根重一に送った書簡でも著作の構想として

「世界を如何に観るべき」という論点を真っ先に挙げる。これらが示す通り世界の観方の問題、すなわち認識の問題は漱石の文学研究の中で最重要課題であったのである。では認識の問題は漱石の理論においていかなる意義を持つのか。

この問いを考察するため本稿は『文学論』第三編 文学的内容の特質を確認したい。この第三編には漱石が認識の問題に取り組んだ思索の成果が映出されていると考えられるからだ。

『文学論』第三編の趣旨は科学と文学とを先鋭に対置することで科学とは異なる文学の特質を浮上させる点にある。漱石は科学と文学との差異を目的・態度・言語の三つの観点から考察する。両者の目的の違いから簡潔に確認しよう。

漱石は、科学の目的は「叙述」にあると主張する。「叙述」とは「How」の疑問を解くことだ。『文学論』では「叙述」は「記述」とも言い換えられる。他方「文学」の目的は「Why」の問いに「説明」を与えることだ。

『文学論』の講義を受講した学生のノートでは「叙述」には《description》(描写)の英語が当てられ、「説明」に相当する語句として《explanation》(解釈)が使用される。科学は《description》＝「叙述」・「描写」であるのに対し、文学は《explanation》＝「説明」・

「解釈」であるのだ。

科学の「叙述」と文学の「説明」との差異は両者の「事物に対する態度」とも関係する。漱石は「科学者が事物に対する態度は解剖的なり」、また、科学者は「必ずや其成分を分解し、其各性質を究めざれば已まないと述べる。科学者は対象を微細に「解剖」し「分解」することでその性質を究明する。しかしこの「解剖」の態度は対象の「全形」を無視し、蔑ろにする傾向がある。そのためこの態度は対象を徹底的に「解剖」「分解」することで、その対象を「破壊」する恐れがあるのだ。

それに対し文学者の態度の特徴は対象の「全形」を捉える点にある。確かに文学者にも人物の性格や容貌などを精緻に観察し、分析する「解剖」の態度が必要となる。しかし文学者の「解剖」はあくまでも手段であり、文学者には対象を緻密に「解剖」した上で再びその要素を総合し「完全形」を描き出すことが求められる⁽¹⁰⁾。この文学者の態度が最終的に目指すのは、対象の全体像を把握し「物の生命と心持ち」や「物の本性」を表現することだ。次の引用を確認しよう。

同じく物の全局を写さむとする場合に於ても、科学者は概念を
〔伝へむ〕とし、文学者は画を描かむとす。換言すれば前者は物の

形と機械的組立を捉へ、後者は物の生命と心持ちを本領とす。

尚科学者の定義は分類の具に供せらるれど、文学者の叙述は物を活かさむが為めの用に過ぎず。科学者は類似をたどりて系統を立てむと欲し、個々の物体に左したる興味を有するにあらず、文学者に至りて其目指すところ物の秩序的配置にあらずして其本質にあり、されば物の本性が遺憾なく發揮せられて「一種の情緒を含むに至る時は即ち文学者の成功せる時なりとす。従つて文学者があらはさんと力むる所は物の幻惑にして、躍如として生あるが如く之を写し出すを以て手腕とす。」⁽¹¹⁾

科学者が伝達する「概念」は「物の形と機械的組立」のこと、つまり対象の外形や形式のことだ。それに対し文学者が関わる「物の生命と心持ち」とは、対象に内在する「本質」や「本性」である。しかも「生命」や「本質」「本性」は、文学者が「一種の情緒」を賦活することで「活かさ」れるのである。

文学者は対象の表層や形式だけではなく、その深層や内部の「本質」「本性」「生命と心持ち」を「一種の情緒」を伴う全体として描き出す。そして作者が対象の「生命」を捉え得たとき、その対象は「躍如として生あるが如く」生き生きと活動する。漱石はこれを「幻惑」と呼び、「幻惑」の生成を文学の意義と認めるのである。⁽¹²⁾

の通り科学者はあくまでも対象の外形や形式を観察し「叙述」する態度を取るのに対し、文学者は対象の内部に入り込み、その「生命」を了解し「説明」しようとするのである。

最後に科学者と文学者が使用する「言語」の相異について確認しよう。科学者は「数字」という記号を用いることで色彩や音声などの「物質界の現象」を数量化・抽象化する。文学者も「数字」を用いるが、その目的は科学者とは異なり「有臭有味のものを」「無味無臭となすが為め」ではなく、「触れ難き或物」を具体化する点にある。科学者の言語は対象を抽象化・一般化するのに対し、文学者の言語は対象を具体化・個別化するのである。⁽¹³⁾

以上の漱石の議論では科学と文学とを対比することで二つの認識の方法が提示されている。一方は科学者のように対象の外形や形式を「解剖的」「分解的」に観察し、それを数量的・抽象的に「叙述」「記述」する態度である。他方は文学者のように対象を総合的に経験し、その内部の「生命」を把握し、具体的に「説明」する態度である。この通り『文学論』第三編は「世界を如何に観るべき」という認識の問いに対し二つの回答を提示する。繰り返しれば、一方は対象を抽象化する科学的認識の態度であり、他方は対象を具体化する文学的認識の態度である。

同様の議論を他のテキストにも見出せる。「中味と形式」(『朝日

講演集』朝日新聞合資会社、明治四四年一月）は、明治四四年八月に行われた講演である。その趣旨は「中味」よりも「形式」を重視する態度を批判する点^(四)にあるが、この講演でも漱石は二つの「物の見方」を述べる。一つは「学者」のように「冷然たる傍観者の地位に立つ」て対象を「観察」する態度である。「冷然たる傍観者」の態度とは「取扱ふ材料から一步退いて佇立すむ」こと、「研究の対象を何処迄も自分から離して眼の前に置かうとする」ことだ。しかしこの認識の態度は「徹頭徹尾観察者である」ため「相手と同化する事は殆んど望め」ない。この認識態度は、対象を外部から「観察」するため「形式」のみを「器械的」に「統一」するに過ぎず「中味」の「統一」には至らない。漱石は「形式の上ではよく纏まるけれども、中味から云ふと一向纏つてゐない」と批判するのである。それに対し他方の認識は「冷然たる傍観者」とは異なり「相手と同化する」こと、対象「其物になりますまして之を体得する」こと、「内部へ入り込んで其裏面の活動からして自から出る形式を捉」える態度である。そしてこの態度によつてはじめて「形式」だけでなく「中味」も「統一」されるのだ。^(五)

この通り漱石は「傍観」的認識と「同化」的認識とを対置する。この二つの態度は『文学論』で論じられた科学的態度と文学的態度とに一致する。なぜなら科学者は「解剖」や「分解」によつて対象

を抽象化・形式化するのに対し、文学者は対象内部の「生命」を具体的に把握すると論じられていたからだ。

「中味と形式」の議論にも対象認識の二つの態度が適用される。さらに漱石は、認識の方法が文学の創作にも関与すると見なす。続いて認識の方法と創作の態度との関係を検討しよう。

二二つの創作の態度——批評的∥主知的態度と同情的∥主情的態度

対象認識の方法と創作の態度との関連について最初に『文学論』
[第四編 第八章 間隔論]の次の一節を確認しよう。

もし此二方法をとつて、之を哲学的に解釈し去らんとするとき、吾人はその題目の深広にして、吾人の今述べんとしつゝある卑近なる形式間隔論の領域を遙かに超越するを認めずんばあらず。如何となれば此二方法は実^(一)に作家の作物に対する二大態度を示すものなればなり。第一法を用るたる作物を批評的作物と名づけて第二法に遵ふものを同情的作物とし以て一切の小説類を二大別するを得べき方法たればなり。批評的作物とは作家篇中の人物と一定の間隔を保つて批判的眼光を以て彼等の行動を叙述して成るを云ふ。此方法によりて成功せんとせば作家自

からに偉大なる強烈なる人格ありて其見識と判断と観察とを讀者の上に放射し、彼等をして一言の不平なく作家の前に叩頭せしめざるべからず。わが千里眼を以て彼等の明を奪ひ、わが順風耳を以て彼等の聡を殺し、わが金剛力を以て彼等の平凡なる人格を摧粉して、一字一句の末に至る迄悉くわが意に賛同せしめて始めて能する事を得べし。同情的作物とは作者の自我を主張せざるの作物を云ふ。たとひ自我を主張するも篇中の人物を離れて、主張すべき自我なきを言ふ。換言すれば両者の間に隔の認むべきなくして、同情の極油然として一所に渾化せるを云ふ。此方法によりて成功せん為めには作家必ずしも篇中人物の行為動作を批判し好悪するの見識と趣味とを要せず、第三者の位置に超然として公平なる判官の態度を嗜好の上に維持するを須ひず。只篇中の人物と盲動すれば足る。篇中の人物の如何に愚昧なるも、如何に浅薄なるも、如何に狹隘なるも作家の問ふ所にあらず。愚昧なるものは愚昧なる所に向つて徹底に同情し、浅薄なるものは浅薄なる所に向つて専念に同情し、狹隘なるものは狹隘なる所に向つて満腔に同情し得て、其同情の真面目なる事吾に同情するが如く甚しきに至つて始めて著者の自我を没し得て讀者の心を動かす。

「間隔論」では主に作者・作中人物・讀者の空間的「距離」を短縮する文学的技巧が論じられる。この引用で漱石は「間隔論」が「哲理」的問題として「解釈」可能である点に注意を促す。この指摘は「作家の作物に対する二大態度」が哲学的問題であることを示唆する。その上で漱石は「作家の作物に対する二大態度」の一方を「批評的」と呼び、他方を「同情的」と名付けるのである。

「批評的作物」は「作家篇中の人物と一定の間隔を保つて批判的眼光を以て彼等の行動を叙述」する作品であり、作者が「第三者の位置に超然として公平なる判官の態度」を取ることで生み出される。この創作態度は「第三者の位置」「超然」「公平なる判官の態度」などの一連の語句が示す通り「冷然たる傍観者」の認識方法に通じる。他方「同情的作物」は、作者が作中人物に「徹底に」「専念に」「同情」し「同情の極油然として一所に渾化」する態度から生み出される。ここで反復される「同情」は《sympathy》つまり共感のことだ。この「同情」＝共感の態度は「中味と形式」で論じられていた「相手と同化する」ことや対象「其物になりますまして之を体得する」ことに通底する。

このように作者の「二大態度」は科学的＝傍観的認識と文学的＝同情的認識に対応する。これらの態度は、対象を外在的観点から「傍観」的に認識するのか、あるいは対象内部に入り込み、その対

象を内在的観点から認識し、経験するかの相異に基づく。そして、この差異は「世界を如何に観るべき」という「哲理」的な認識の問題が作者の創造と連繫することを示すのである。

さらに認識と創作との問題に関し、漱石が明治四〇年から四二年頃に記したと推定される「断片」を取り上げよう。この断片の前半で漱石は文学の《representation》(表現／表象)を認識の態度と関連付けて論じる。つまり文学とは《subject》(主体)である「吾」が「吾」自身や「物」を表現／表象する行為であり、その態度は「知・情・意」から成る人間精神^(心)に依じて《intellectual attitude》(主知的態度)／《emotional attitude》(主情的態度)／《volitional attitude》(主意的態度)に三分される。ただし漱石は、意志は文学の表現／表象には直接には関与しないとして除外し「主知的態度」と「主情的態度」を文学的表現／表象の二大態度と見なすのである。「主知的態度」は《truth》(真相)の表現／表象を目的とする。この態度に基づく文学は「scientific attitude ナ文芸トナリ、読者に「lifeノ真相ハコンナモノデアルト云フコトヲ教エ」る。その典型は《naturalism》である。それに対し「主情的態度」は「poetical attitude ヨリ成ル文芸」を生む。この態度に拠る文学は読者に「美ヲ味ヘト教ヘル。善ニ与セヨト教ヘル。壮ヲ行ヘト教ヘ」る。このような「作家ノ emotion

(善悪美醜)ヲ写スコトガ主トナル」文学、つまり「lifeカラ得タ emotion 即チ作家ニヨッテ emotionalise サレタ世界ヲ写ス」文学は《romanticism》と呼ばれる。

この断片では『文学論』の「間隔論」とは異なる視角から作者の「二大態度」が考察される。ただし作者の認識方法が創作の態度や立場を規定すると見なす点で、この断片も「間隔論」の議論と前提を共有するのである。

しかも《naturalism》と《romanticism》の対照が示すように、漱石の主張は明治三〇年代から四〇年代にかけて議論された自然主義の描写論と呼応する。例えばこの《描写の時代》の評論として著名な田山花袋『生』に於ける試み(『早稲田文学』明治四一年九月)は「平面描写」を提唱し、「単に作者の主観を加へないのみならず、客観の事象に対しても少しもその内部に立ち入らず、又人物の内部精神にも立ち入らず、たゞ見たまゝ聞いたまゝ触れたまゝの現象をさながらに描く」と主張する。傍観的認識に同化的認識を対置し、内部「生命」の把握を重視する漱石の議論は、「客観の事象」の「内部に立ち入」ることを拒否する『生』に於ける試みの主張の対極に位置するように見える。しかし花袋は描写の「客観」性の主張に偏向していたのではない。『小説作法』(明治四二年六月)で花袋は「主観的」な「一人称小説」と「客観的」な「三人小説」

の「描法」の性質を次の通り指摘する。

万物に主観的なところ、客観的なところがあると均しく、描法にも主観的、客観的の二法がある。

乃ち一人称で書く文章、『私は』と書き出して、自己の腹中を残す処なく描き出すものと、三人称で書く文章、『かれは』と作者が傍に立つて客観的に人間と人間の社会とを描くものと、二つがある。(中略)

一人称小説が何うかすると、作者の立場と余り密接に過ぎることがあると共に、三人称小説は余りに客観に過ぎるといふ弊があつて、作者の立場が余り離れ過ぎるといふことが往々にしてある。前者は同情の弊に陥り易く後者は軽佻の弊に陥り易い。この二者は互に其長所を利用して、互に其短所を補つて行くやうにすることが必要だ。

今少し工夫を積んで見たら、一人称小説に客観的描写を加へ、三人称小説に主観的描写を加へて、打つて一丸と為したやうな文体が出来るかも知れぬ。⁽¹¹⁰⁾

花袋は「一人称小説」の「同情」性と「三人称小説」の「傍観」性が相互に補填することで新しい「文体」の創出の可能性に触れる。

この花袋の主張と並置するとき、漱石は認識論の問題を通じて同時代の「小説作法」の課題と対峙していたことが鮮明となるのである。

ここまで確認してきた通り、漱石は「世界を如何に観るべき」という認識論の問題を発し、対象認識の仕方には二つの態度があると答える。一方は対象を解剖的・傍観的に観察する科学的・批評的・主知的態度である。他方は対象を総合的・同化的に捉える文学的・同情的・主情的態度である。そしてこの二つの認識態度は作者の創作の立場に直接に結び付くのである。

ではこの漱石の認識論はいかなる意義を持ち、いかに評価されるべきか。本稿はこの問いを二つの角度から検討したい。一つは其時の思想の動向として所謂「生の哲学」⁽¹¹¹⁾に属するアンリ・ベルクソンの哲学と交通させる。もう一つは通時的思想の潮流としてロマン主義の文学論と対比する。

三 漱石の認識論と同時代の哲学——アンリ・ベルクソンの認識論

アンリ・ヘルクソン (Henri Louis Bergson, 1859-1941) は、明治時代後半から大正時代にかけて哲学・思想・文学の領域で盛んに論じられたフランスの哲学者である。日本哲学史の研究ではベルクソンに最も早く言及したのは西田幾多郎⁽¹¹²⁾だとされる。漱石の認識

論の同時代的意義を考察するため、ここでいったん西田によるベルクソンに関する発言を經由したい。^(一四)

西田幾多郎（一八七〇—一九四五）の「ベルクソンの哲学的方法」〔芸文〕一（八）、明治四三年一月）は、日本のベルクソン受容を示す最初の論文である。^(一五)この論文で西田は、ベルクソンは「自然科学の説明は實在の表面的説明にすぎない」と考え、人間の「精神世界の奥底」を了解するため、「自然科学的研究法」とは異なる独自の「哲学的方法」を展開したと指摘する。^(一六)その独自の「哲学的方法」が「直観 (Intuition)」である。西田は次の通り論じる。

哲学即ち絶対の学問といふのは如何なるものであらうか。ベルクソンに従へば、物には二つの見方がある。一つは物を外から見るのである、或一つの立脚地から見るのである。それで、其立脚地に依つて見方も變つてこなければならぬ、立脚地が無数にあることができるから、見方も無数にある筈である。又かく或立脚地から物を見るときふのは物を他との関係上から見るのである、物の他と関係する一方向だけ離して見るのである、即ち分析の方法である。分析といふことは物を他物に由つて言ひ表はすことで、此方の見方はすべて翻訳である。符号Symbolに依つて言ひ現はすのである。もう一つの見方は物を内から見

るのである、着眼点などいふものは少しもない、物自身になつて見るのである、即ち直観Intuitionである。従つて之を言ひ現はす符号などいふものはない、所謂言絶の境である。右二種の見方の中には第一の見方ではいかに精緻を極めても、畢竟の相対的狀態を知るに過ぎぬ、到底其物の真的狀態を知ることができない、唯第二の方法のみ之に依つて物の絶対的狀態に達することができるのである。^(一七)

ベルクソンは「物には二つの見方がある」と主張した。その「一つは、物を外から見る」態度、つまり「分析の方法」である。もう一つは「物を内から見る」態度、「物自身になつて見る」態度である。この「物自身になつて見る」態度が「直観」の方法である。西田は続けて次の通り指摘する。

扱、右に云つた様な哲学的直観と科学的方法なる分析によつて得た概念的知識とはいかに違ふか、又此二者は如何なる関係に於て立つべきか、これベルクソンが論ぜんとする所のものである。ベルクソンに従へば、我々に与へられた直接の具体的實在は流転的であり、發展的である、瞬時も止むことがない、つまり生きた物である。かゝる實在の真面目は到底外から之を窺ふ

ことはできぬ、唯之と成つて内より之を知ることができるのである（所謂水を飲んで冷暖を自知するのである）。直観といふのは前にもあつた様に全然自己の立脚地を棄て、利害得失の關係を一掃し、物自身になつて見るのである⁽¹⁶⁾。

「科学的方法なる分析」を通じて「概念的知識」が形成される。

しかしこの方法に拠つては「具体的实在」を把握することは不可能である。「流転的」な「生きた物」の「真面目」を認識するには「唯之と成つて内より之を知る」、「物自身になつて見る」哲学的「直観」が要請されるのである。

西田の解説はベルクソンの「形而上学入門 (Introduction à la métaphysique)」（一九〇三）に基づく。そこでベルクソン自身の論文から次の二つの引用を確認しよう。

形而上学の定義と絶対についての考え方をいろいろ比べてみると、外見的な意見の相違にもかかわらず、ものを知るのに根本的に異なつた二つの仕方があるという点で、哲学者たちの意見が一致していることがわかる。第一の仕方は、ものの周りをまわることであり、第二の仕方は、ものの中に入ることである。

第一の仕方は、私たちのよつて立つ視点と、私たちが表現に用

いる記号とに依存する。第二の仕方は、どのような視点にも關係なく、どのような記号にも頼らない。第一の認識は相対にとどまるが、第二の認識は可能であれば絶対に到達する⁽¹⁷⁾。

（前略）絶対は直観のうちだけに与えられる。それ以外はすべて分析の領分に属する。私がここで直観というのは、対象の内部に身を置き、その対象がもつ唯一なもの、すなわち表現できないものと一致する共感である。それとは逆に分析とは、対象を既知の要素へ、いいかえれば他の対象と共通する要素に還元する操作である⁽¹⁸⁾。

前者の引用でベルクソンは「ものを知るのに根本的に異なつた二つの仕方がある」と述べ、「第一の仕方は、ものの周りをまわることであり、第二の仕方は、ものの中に入ることである」と指摘する。そして「第一の認識は相対にとどまるが、第二の認識は可能であれば絶対に到達する」と主張される。

後者では「第一の認識」が「分析」とされ、「第二の認識」は「直観」または「表現できないものと一致する共感」と呼ばれる。このようにベルクソンは認識を「分析」と「直観」または「共感」に大別するのである。そしてこの二つの認識方法はそれぞれ適用さ

れるべき対象が異なる。「形而上学入門」の本文に附された次の注記を確認しよう。

(前略) 認識が計量を目的として対象を扱う場合には一つのはっきり定まった方向を取り、実在と共感するために関係や比較という底意から自由になる場合には別の、いや逆の方向へ進んでいくということとは否定できない。第一の方法が物質の研究に適し、第二の方法が精神の研究に適していること、といってもこれら二つの対象が相互に侵入し合い、したがって両方法が互いに助け合わなければならないということを私は示した。第一の場合に関わるのは空間化された時間と空間であり、第二の場合には実在的な持続に関わる。考えを明瞭にするために、第一の認識を「科学的」と呼び、第二の認識を「形而上学的」と呼ぶのがますます有益だと私には思われた。^{三三〇}

「計量」や「関係や比較」すなわち「分析」は「物質の研究」^{三三〇}「科学」に適するのに対し「精神の研究」^{三三〇}「形而上学」では「共感」^{三三〇}「直観」の方法が採用されるべきだ。

ベルクソンは、従来の哲学やその分科としての自然科学が精神を計量的・空間的存在として捉えてきた誤謬を批判する。精神を把握

するには自然科学的「分析」とは異なる哲学的「直観」^{三三〇}「共感」^{三三〇}が適用されなければならない。このようにベルクソンは物質と精神の二元論の徹底を図るのである。

ベルクソンは自然科学を否定し、哲学や形而上学の優位を訴えるのではない。自然科学の方法はあくまでも空間に固定された物質の「分析」のみに使用されるべきであるのに対し、流動的な精神は哲学や形而上学の方法によって「直観」^{三三〇}「共感」^{三三〇}されなければならないと強調するのである。

ベルクソンの思想と漱石の理論との間には認識の方法を二区分する類似の発想がある。それらは外在的^{三三〇}科学的認識と内在的^{三三〇}文学的(または哲学的)認識である。ではこの類似から漱石の認識論の意義を同時代の哲学や思想の動向にいか位置付けられ得るか。

再び西田の論文に戻ろう。西田は「哲学」を「絶対の学問」と見なした上で、ベルクソンの認識論の意義を「自然科学的研究」に対する人間の「精神生活の奥底」^{三三〇}を探究する方法として認めた。この議論を参照すれば、漱石の認識論の意義も同様に自然科学的方法とは異なる文学独自の方法を観取し、それに対置した点に認めることができる。漱石が取り組んだ認識論の課題は、ベルクソンの「生の哲学」^{三三〇}も含まれる同時代の哲学や思想の動向——それらを自然科学に対する「精神科学」または「人間科学」と総称できよう——と連

動していた。

ドイツ哲学研究者の丸山高司は、一九世紀の西洋で学問の方法を巡り「それぞれ別の認識関心にもとづく二種の科学」間の論争が再燃した経緯を次の通りまとめる。それは「説明科学」と「解釈科学」との対立である。

「説明科学」の認識論的原理は、「主観と客観の関係」である。「意識一般」としての認識主観を立て、この認識主観によって対象化された同一の「客観的世界」を方法的に構成するということ、これがデカルトのコギト以来、近代知の基本構造をなしている。(中略)

他方、「解釈科学」の認識原理は、「主体と主体との関係」である。研究者と対象との関係は、観察者と被観察者との関係ではなく、むしろ話し合いながら行為している二人の人間関係とみなされるべきである。両者はともに共通の意味世界に帰属し、共通の解釈図式を手掛りにして、たがいに相手の「表現」を「理解」する。⁽¹¹⁾

端的には「説明科学」は自然科学に、「解釈科学」は精神科学または人間科学に対応する。本稿は漱石の「文学の哲学」も科学的言

述と文学的言述の差異を前提にする点で同時代に生じた学問の方法を巡る論争と関心を共有するという仮定を提出したい。漱石の理論は、学問論の観点から巨視的に捉えられるならば、一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけて一層、支配的になる自然科学的態度・価値観に対する文学＝精神科学＝人間科学の対抗として読み直される可能性を秘めるのである。

四 漱石の文学観とロマン主義の文学論——文学の喚情性と有機体論

さらにロマン主義の文学論と対比することで漱石の「文学の哲学」を通時的な思想や文学論の歴史に拓きたい。既に確認した通り漱石は「truth≠represent」する「scientific+文芸」と「emotionaliseサレタ世界ヲ写ス」「romantic+文芸」とに大別する。ここで仮定したいのは、科学と文学との確執、または《truth》を表象する文学と《emotion》を表現する文学という対立の発想自体がロマン主義的価値観の反映ではないかということだ。

イギリス・ロマン主義文学研究の大家M・H・エイブラムズ(M. H. Abrams)は、古典的著作『鏡とランプ』(The Mirror and the Lamp: Romantic Theory and the Critical Tradition)で「凡そ次のように主張する。つまり古典主義時代の詩人は、世界を忠実に映

し出し、模倣・再現する受動的な「鏡」の存在と見なされたが、ロマン主義時代に至ると詩人は、自らが発する内的光によって世界を能動的に照らし出す「ランプ」として自己を規定するようになった。さらに次の引用を確認しよう。

詩は精神の感動した状態を伝達する手段として、散文と対立するものではなく、事実あるいは「科学」の非感動的な叙述(assertions)と対立するものである。

「多くの混乱が」と、ワーズワスは不平を述べていたが、「詩と事実問題、ないしは科学とのより哲学的な対照区分ではなく、詩と散文との対象区分のために、批評のなかに生じている」(『文芸批評』二二ページ註)。詩と歴史とを対比させ、この対比の根拠を詩は現実の出来事ではなく、普遍的ないし観念的形相を模倣すると考えるのは、古代の人びと以来普通のことであった。ロマン主義批評家たちが通常とるやり方は、詩の対比物を歴史から科学におきかえ、この対比の根拠を表現(expression)と記述(description)、⁴⁶⁾ ⁴⁷⁾は喚情的言語(emotional language)と認識的言語(cognitive language)の差異においたことである。一八三五年の「ブラックウッズ・マガジン」のなかで一人の筆者が述べているように、「散文は〈知性〉の言語であり、詩は

〈情緒〉の言語である (Prose is the language of intelligence, poetry of emotion.)」(『詩の原理』⁴⁸⁾)。

エイブラムズは、ロマン主義という多面的な芸術や文学の潮流を規定する指標の一つとして、その運動が文学と科学との差異を強調した点を挙げる。エイブラムズに従えば、ロマン主義の批評家や詩人は科学の「記述(description)」性⇨再現性に対し、文学の「喚情(emotion)」性⇨表現性を対置することで詩の独自の意義や価値を主張したのである。

既に確認した通り、漱石は科学と対比することで文学の特徴を論じる。また漱石は文学の表現／表出を「主知的態度」と「主情的態度」とに二分する。その上で漱石は「主知的態度」は「scientific」な記述の基盤となり、「主情的態度」は「romantic」な文学を生むと論じていた。エイブラムズが指摘するように、科学と文学の対照性の強調がロマン主義の創案だとすれば、漱石の文学観は科学的言述から文学的言述を区別する点でロマン主義に連なる見解だと仮定できる。

さらに漱石の文学観とロマン主義との接点を他にも求めることが可能だ。ここまで検討してきた漱石の言説には「生命」や「life」の概念が繰り返し現れていた。例えば漱石は、文学は「物の生命と

心持ちを本領とす」と述べ、文学の表現／表出は『Life』に関わることを指摘していた。「生命」や『Life』は多義語であり、文学や芸術を語る際の陳腐な常套句でもある。しかし漱石の理論が「生命」や『Life』の概念を頻用する点はもっと注目されて良い。⁽¹¹⁶⁾ 漱石は次の通り『文学論』を通じて「生命」の語を多用するのである。

詩人の歌はむとするは、雛菊が自然界に対する情的態度にして、描かんとするは其生命⁽¹¹⁷⁾にあり。

Milton の Satan, Swift の Yahoo 或は沙翁の A Midsummer Night's Dream 中の Oberon, Titania, Tempest の Caliban 等凡て是等は此世に於て求めて得べきものにあらざれば科学的立脚地より擲して不合理なるは無論のことなれど、吾人が是等より受くる感情、感覚は生命を有し偽りなきを以て是等は完全なる文芸上の真を具有するものなるを知る。⁽¹¹⁸⁾

約言すれば科学者が理性に訴へて黑白を争はんとするに引きかへて、文学者は生命の源泉たる感情の死命を制して之を擒にせんとす。科学者は法廷の裁判を司るが如く、冷静なる宣告を与ふ。文学者は慈母の取計ひの如く理否の境を脱却して、知らぬ

間に吾人の心を動かし来る。⁽¹¹⁷⁾

これらで漱石が論じるのは、文学者の役割とは、対象の「生命」を捉えるとともに、その対象を「生命」ある存在として描き出すということだ。そしてこの発想は文学の行為を「生命」の表現として、また文学作品の一つの「有機的」な「生命」と見なす発想へと展開していく。『文学評論』（春陽堂、明治四二年三月）の「第四編 スキフトと厭世文学」を取り上げよう。

文学は吾人の趣味の表現^{イニテレスト エキスプレッション}である。即ちある意味に於て、吾人の好悪を表はすものである。(中略) 凡ての文学的作物は、普通以上の広義から見ての訓戒を読者に与へるものだと云ふ事は述べて置いた。此広義に解釈した訓戒とは、作物の読者に及ぼす活きた影響の事で、此活きた影響が作物から出る如く、作家は此活きた影響を事実(もしくは想像によつて多少変化されたる事実)から得たのである。だから作物にかいてある事は、事実もしくは想像によつて多少変化されたる事実だけでも、外の言葉で云へば、作家が自然から受けた活きた影響を書いたと云つても差支ない。此活きた影響とは、有機的に吾人の生命の一部を構成するもので、枯死、孤立した断片的の知識とは違

ふ。即ち未来の行為言動を幾分でも支配する傾向を帯びたものである。是が趣味である。^(三五)

漱石は「文学は吾人の趣味の表現である」「吾人の好悪を表はすものである」と述べた上で「趣味」すなわち「好悪」は「作家が自然から受けた活きた影響」であり「活きた影響」とは、有機的に吾人の生命の一部を構成する」と論じる。つまり「趣味」の表現である文学は作者の「有機的」な「生命」の表出であり、「活きた」ものである。同じく『文字評論』から「第六編　ダニエル、デフォー」と小説の組立」の一節を確認したい。

(前略) 篇中の人物の方が自由意志に従つて、自分で纏まつた筋を構成する様に働らいて行かなければならない。さうすると其小説の統一は作者の作つた統一でなくつて、篇中人物の作つた統一になる。だから有機的になる。形式を脱して生気を帯びてくる。統一が心理上の必要になつて来る。

有機的の統一は器械的の統一と同じく部分と部分の関係から成立する。ただ有機的であり得る為には、部分と部分が作者の命令によつて関係してゐてはならぬ。自己の本性によつて連結しなければならぬ。^(三六)

漱石は小説の「有機的の統一」を重視する。「有機的の統一」とは、小説の「部分と部分」とが「作者の命令によつて」恣意的・人為的に関係付けられる「器械的の統一」とは異なり、小説の「筋」や「篇中人物」が「自己の本性」に従つて自発的・自立的に展開していく在り方を指す。

ここで示されるのは「生命」と「器械」の対立である。漱石は、小説は一つの「生命」のように個々の部分が自律するとともに調和的・緊密に「連結し」、最終的には「有機」体として全的に「統一」されるといふ小説観を提示する。小説は一つの「有機的」な「生命」として生きるのである。

小説が一つの「生命」であるならば「生命」を創造する作者は神に匹敵する「クリエーター」に他ならない。例えば漱石は「作家は神と等しく新たに実際以外の人間或は人間以上の人間をクリエートする力を有つて居る」(「作中の人物」『読売新聞』明治三九年一月二日)^(三七)、「神は創造するがよい」(文章一口話『ホトトギス』一〇(二)、明治三九年一月)^(三八)、「拵らへた人間が活きてゐるとしか思へなくつて、拵らへた脚色が自然としか思へぬならば、拵へた作者は一種のクリエーターである」(「田山花袋君に答ふ」『国民新聞』明治四一年一月)などと語るのである。

これらの評論で漱石は、「人間」を「創造」する作者は「クリエーター」

であることを繰り返して主張する。小説家が作中人物を《create》することは神の創造に等しい行為なのである。

文学者は人間を「創造」する。そして文学者によって創造された作品それ自体が全体として一つの「有機的」な「生命」を獲得する。このように「有機的」な「生命」と「創造」の概念は漱石の文学観の重要部分を構成する。

漱石の発想を文学や思想の歴史に置くなら、芸術における「有機体論」に接近するように見える。「有機体」論とは芸術作品を「有機体」や「生命」として捉える思考である。本稿が「生命」や《life》の概念との関連で提起したいのは「有機体論」の観点から漱石の理論それ自体を再考することだ。

「有機体論」の説明を比較文学研究者のG・N・G・オルシーニ(G.N.G. Orsini)に拠る記述に従い確認しよう。

美学で有機体論 (organicism) と呼ぶのは、ふつう有機的統一 (organic unity) の教説のことであり、また同類の有機的形式とは「内面」形式 (“inner” form) の概念のことである。この名称の由来するところは一つの仮説、すなわち、芸術作品は有機体〔生物〕 (a living body) に譬えてよく、したがって作品の部分相互の関係は恣意的でも人為的でもなく、生体諸器

官に見られる関係に似て緊密につながっている、という仮説である。^(四三)

(前略)〈機械的形式〉(Mechanical Form) に対して立てられる〈有機的形式〉(Organic Form) 概念も有機体論を体現している^(四四)と見てよからう。〈機械的形式〉とは、これとは無縁の何ものかに外部から押しつけられる形式のことであるが、他方〈有機的形式〉とは、「内部から」(“from within”)、すなわち外的規則とか指定範囲からでなく主題そのものから、自発的に展開して主題と適合するにいたる形式のことである。^(四五)

漱石は文学作品における「有機的の統一」の重要性を強調する。この主張の中にオルシーニが論じるような「有機体論」の基本的命題を認めることが可能である。

オルシーニによれば「有機体論」の萌芽は古代ギリシア哲学に認められるという。ただし英文学の中で「有機体論」を積極的に推進したのはロマン主義の詩人たち、特にサミュエル・テイラー・コールリッジ (Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834) である。^(四六)ここではコールリッジの「有機体論」についてエイブラムズの説明を確認しておきたい。

幾度もくりかえして、コールリッジは詩の二つの様式を区別し称賛するために、二重焦点のレンズを用いている。その一つは、機械論的な (mechanical) 用語で正しく説明することができるものである。それは細かな感覚と記憶の形象に源を発し、その制作品は、空想 (fancy) / 「悟性 (understanding)」 / そして経験による「選択 (choice)」という低級なほうの機械だけを含んでいる。従ってそれは、才能 (talent) のなす仕事であり、最高級より下の階級に属する。(中略) 別のもっと偉大な種類の詩は有機的 (organic) である。それは生命のある (living) 「觀念」に源を発し、その制作品は、想像力 (imagination) や「理性 (reason)」や「意志 (will)」というもっと高級な機能を含んだものである。(中略) 両者の「本質的な相違」は、「機能的 (mechanical) な才能の形成能力」と「靈感を与えられた天才の創造的で、制作的な生命力 (creative, productive, life-power)」との相違であり、しかも後者は、「すべての構成部分において、〈内部から〉」修飾された制作品という結果にならって出現する。

例えば、「ボーマントとフレッチャーの劇は、単なる集合体にすぎず、統一はみられない。ところが一方、シェイクスピア

の劇には成長し内部から展開する生命力 (vitality) があり」、このために「シェイクスピアは、天才の高さ、幅、深淵をそなえている。(後略)」^(四六)

エイブラムズによればコールリッジは芸術作品を二つに区分する。一方は「機械」的作品であり、他方は「有機的」作品である。「機械」的作品は「才能」ある作者が規則に従って生み出すのに対し、「有機的」作品は「天才」の「想像力」によって「創造」され、「成長し内部から展開する生命力」を持つに至る。

このように確認すれば、作者の「創造」から生まれた作中人物が「自由意志」を持ち、作者から自立していくこと、また文学作品は「自己の本性」に従って展開する「有機体」と成ることを重視する漱石の主張は、コールリッジの「有機体論」に近接する。この「有機体論」的文学観にも漱石とロマン主義の思潮との親近性を見出すことが可能である。

おわりに——『Organic』『Life』という視座

本稿は「文学の哲学」に関する予備的考察として漱石の理論における認識の問題を検討した。漱石は対象認識の態度を科学的に傍観的、批評的に主知的態度と、文学的に同化的に同情的に主情的態度

とに二分する。そして漱石は、認識の態度が作者の《representation》の態度にも妥当すると考える。ではこの主張は理論の歴史の中でいかなる意義を持ち得るのか。本稿ではこの問いに関し三つの仮説を提示した。

第一にベルクソンの哲学と対比することで漱石の理論は共時的な哲学や思想の動向と課題や関心を共有するとの仮説が成立する。その課題とは自然科学的認識に対する精神科学的認識の定立である。

第二に漱石は科学的言述と文学的言述との差異を前提としており、この構図から漱石の理論はロマン主義的文学論の系譜に連なるといふ仮説が導出される。

精神科学とロマン主義の言説は、漱石の文学論が依拠する歴史的・系譜的位置を探究する上で、有効な視座・媒介となるだろう。

さらに第一と第二の仮定から浮上するのは、漱石の理論における《Organic》や《Life》とどう概念の問題である。この「有機」性や「生命」の概念は、漱石の理論の「根本」に位置し、その理論を歴史に拓く視点となる可能性を持つのである。

—注—

- (一) 『漱石全集』一四、岩波書店、一九九五年八月、九頁。
- (二) 木戸浦豊和「〈印象〉・〈観念〉・〈情緒〉——夏目漱石の

〈文学の哲学〉とイギリス経験論」『日本文芸論争』二五、二〇一六年三月）は、漱石の認識論への関心をイギリス経験論の受容の観点から考察した。

(三) 内容に立ち入ることはできないが、近年『文学論』や漱石の理論を論じた著作として以下が刊行されている。

- ・ 山本貴光『文学問題 (F + f) +』幻戯書房、二〇一七年一月

二目
・ 塚本利明『漱石と英文学Ⅱ——『吾輩は猫である』および『文学論』を中心に』彩流社、二〇一八年八月

・ 小川栄一『漱石を聴く——コミュニケーションの視点から』大空社出版、二〇一九年三月

・ 服部徹也『はじまりの漱石——『文学論』と初期創作の生成』新曜社、二〇一九年九月

・ 神山睦美『終わりなき漱石』幻戯書房、二〇一九年一月
・ 小倉脩三『漱石の文学理論』翰林書房、二〇一九年一月

(四) 村岡勇編『漱石資料—文学論ノート』岩波書店、一九七六年五月、八頁。

(五) 同前。

(六) 『漱石全集』三二、岩波書店、一九九六年三月、二五四頁。

(七) 主体と客体とを明確に峻別する西洋近代の認識論は、主体が

客体としての自然に包摂されると捉えることが多い儒教的伝統・発想にとって全く異質な思考であった。そのため西洋近代の認識論の受容は日本の近代思想・文学を形成する上で困難な課題の一つとなった。この課題に関し渡辺和靖『明治思想史——儒教的伝統と近代認識論』(ペリカン社、一九七八年二月)を参照。

文学者における西洋近代の認識論の受容について、栗原飛宇馬「萩原朔太郎研究・思索の軌跡——「未発表原稿」を視座として」(日本大学、二〇〇五年、博士論文)が、萩原朔太郎の詩学におけるカント認識論の受容の様態を「芸術的認識論」と命名し論じる。

また山本亮介「形式主義文学論の周辺」(『横光利一と小説の論理』笠間書院、二〇〇八年二月)は、カント認識論が横光利一の文学理論に及ぼした影響を考察する。日本近代の文学理論・詩学と認識論との関係は改めて検討されなければならない問題である。

(八) 前掲注(一)『漱石全集』一四、一二四頁。

なお立花太郎「漱石の『文学論』における科学の意味について」(『城西大学研究年報』九、一九八五年三月)および同「夏目漱石の『文学論』のなかの科学観について」(『化学史研究』三三、一九八五年二月)は、科学の「記述」性と文学の「説明」性の着想を、漱石はイギリスの数学者・統計学者カール・ピアソン(Karl Pearson, 1857-1936)の『科学の文法(The Grammar of Science)』

(一九九二年)から得たと指摘する。『科学の文法』は英語圏で科学の方法を論じた科学哲学的著作の先駆であり、日本ではプロレタリア文学の評論家として知られる平林初之輔が春秋社の「世界大思想全集」の一冊として『科学概論』(一九三〇年)の題名で翻訳している。ピアソンの業績の功罪に関し富山太佳夫「消された男、カール・ピアソン」(『現代思想』一六(三)、一九八八年三月)、『ダーウィンの世紀末』青土社、一九九五年一月収録)や、伊勢田哲治「科学哲学の源流をたどる——研究伝統の百年史」(ミネルヴァ書房、二〇一八年一月、二二〇〜二五頁)も参照。

(九) 金子三郎編『記録 東京帝大一学生の聴講ノート』(リレー企画、二〇〇二年三月、三七一頁)を参照。この「聴講ノート」は、漱石が東京帝国大学で明治三六年(一九〇三)九月から明治三十八年六月まで行った講義「General Conception of Literature」を受講した学生・金子健二のノートを翻刻したものである。金子健二の「聴講ノート」の当該頁には《description》と《explanation》の典拠としてKarl Pearson, *The Grammar of Science*が挙げられており、これは前掲注(八)の立花太郎の考察を裏付ける。なお前掲注(一)服部徹也『はじまりの漱石』は漱石の講義を受講した学生たちのノートを綿密に調査し、その授業の実態と『文学論』との関係の解明に取り組んでいる。

(一〇) 前掲注(一)『漱石全集』一四、二二七～八頁。

(一一) 前掲注(一)『漱石全集』一四、二四一～頁。

(一二) 飯田祐子「読者としての漱石」(PAJIS: Proceedings of

the Association for Japanese Literary Studies, 9, 2008 Summer)

および「幻惑される読者」(『文学』一三(三)、二〇一二年五月)

が、漱石の理論における「幻惑」を詳細に論じている。

(一三) 前掲注(一)『漱石全集』一四、二四五～六頁。

(一四) 漱石は「中味と形式」でドイツの哲学者ルドルフ・クリス

トフ・オイケン(Rudolf Christoph Eucken, 1846-1926)の著作

を取り上げ「中味」よりも「形式」を重視する典型例として批判す

る。なお近代日本におけるオイケンの受容について林正子「森鷗外

の〈文化〉認識とオイケン受容」(『岐阜大学国語国文学』二九、二

〇〇二年五月)が詳しい。

(一五)『漱石全集』一六、岩波書店、一九九五年四月、四五三～

四頁。

(一六) 前掲注(一)『漱石全集』一四、三九六～七頁。

(一七) 木戸浦豊和「Sympathyの文学論——夏目漱石『文学論』

における「同感」と「同情」をめぐる」(『日本近代文学』八八、

二〇一二年五月)および同「夏目漱石・島村抱月・大西祝における

「同情」の文学論——一八世紀西洋道徳哲学の《sympathy》を視

座として」(『日本近代文学』九六、二〇一七年五月)は、漱石の理
論における「同情」=《sympathy》の問題を論じる。

(一八)『漱石全集』第一九巻、岩波書店、一九九五年一月、三

六一～三六四頁

(一九) 古田亮「知情意」論をめぐるノート——あるいは、近代

美術思想における心理主義の位置」(米倉迪夫ほか『日本における

美術史学の成立と展開——東京国立文化財研究所、二〇〇一年三月、

科学研究費補助金基盤研究(A) 研究成果報告書 平成九年度——

二年度)および同「心」とは何か 知情意論の展開」(『美術「心」

論——漱石に学ぶ鑑賞入門』平凡社、二〇一二年五月)は、日本近

代における「知・情・意」論の受容を論じる。古田の議論を基に

「知・情・意」論をまとめておく。

「知・情・意」論の体系を整備したのは、一八世紀後半のドイツ

の哲学者ヨハン・ニコラウス・テーテンス(Johann Nicolaus Tetens,

1736-1807)である。テーテンス以前には人間の精神は知性と意志

に二分され捉えられていたが、彼はそれを知性・意志・感情に三分

した。「知・情・意」はそれぞれ「真・美・善」の理念に対応する。

以降、一九世紀を通じて「知・情・意」論が人間の精神構造を理解

する有力なパラダイムとなった。

日本では西周の翻訳書を契機に「知・情・意」論が受容された。

それはジョセフ・ヘン (Joseph Hare, 1816-1874) の *Mental Philosophy: Including the Intellect, Sensibilities, and Will* (1857) を翻訳した『心理学』(明治八〜十二年)である。この書物は「心理学」と題されたが、実験と観察を通じて心の働きを究明する自然科学的「心理学」ではなく、原題にある通り「知・情・意」に基づき人間の心を思弁的に捉える「精神哲学」であった。そして明治一〇年代から二〇年代初頭にかけ「知・情・意」論を枠組みに持つ書物が多数刊行され、その理論が浸透する。中でもスコットランドの哲学者アレクサンダー・ベイン (Alexander Bain, 1818-1903) の著作が教科書として採用されたため、漱石ら明治二〇年代に大学で学んだ学生たちは「心理学」「精神哲学」として「知・情・意」論を学んだのである。

また大橋崇行「明治期の「詩」と「小説」——山田美妙の初期草稿」(『言語と思想の言説——近代文学成り立ちにおける山田美妙とその周辺』笠間書院、二〇一七年一〇月)は「知・情・意」論の受容を踏まえ、坪内逍遙・山田美妙・漱石の理論的言説を概観する。

(二〇)『定本 花袋全集』二六、臨川書店、一九九五年六月、二五七〜八頁。なお当該引用箇所の出出は「小説作法」(『文章世界』二(一一)、明治四〇年一〇月)である。

前掲注(七)渡辺和靖は、明治時代末期から大正時代初期の所謂

「自然主義論争」において争点となった主観と客観との対立の問題の根底に認識論上の立場の相異があると指摘する。「安倍(能成——引用者注)と抱月との対立の由来するところは、現実を認識する視点そのものの差異、即ち世界観そのものの差異に他ならない。安倍は、くり返し、現実とは人間が認識したもの、主観によって捉えられたものであることを語り、自然主義の言う「現実」が、客観、ありのままではなくて、特殊な見方で捉えられた主観的なものであることを強調した」(『明治思想史』三八頁)。

また藤井淑禎は「自然主義論争」を「〈主観〉〈客観〉論争とでも呼んだほうがふさわしい」と述べた上で、論争の過程で主観の内実が変質していき、明治四四・五年には「主観」偏重の新たな文学運動に橋渡しするかたちで、数年前とは比較にならないほど高次元の主客融合という難問が作家たちの前に立ちはだかっていた。肥大化した〈自我〉を持って余す主人公にいかにも同化した、他方でそれをどのようにして客観化しうのか」という小説技法の課題が新たに浮上したと整理する(『行人』と二つの〈自我〉)『小説の考古学へ——心理学・映画から見た小説技法史』名古屋大学出版会、二〇一一年一月)。

(二二)ここでは「生の哲学」について哲学者の新田義弘の簡潔な解説を提示しておきたい。「(前略)生命独自の構造を解明できる方

向を探りつつ、生命と知識の関係を哲学として問おうとする大きなうねりが一九世紀末ころから二〇世紀はじめにかけて、時代の問いとして生じた。ベルクソン、ディルタイ、ジェームスなどといった人たちに代表される「生の哲学 (Lebensphilosophie)」(第一期の生の哲学)である[『世界と生命——媒体性の現象学へ』青土社、二〇〇一年九月、一六五頁]。

(二二) 日本におけるベルクソンの受容について、鈴木由加里「生命・生」(石塚正英・柴田隆行監修『哲学・思想翻訳語事典』増補版、論創社、二〇二三年五月、一八〇〜一八一頁、初版二〇〇三年一月)、および宮山昌治「大正期におけるベルクソン哲学の受容」[『人文』四、二〇〇六年三月]を参照。

また漱石におけるベルクソンの受容に関し、佐々木英昭「ベルクソン」(三好行雄編『夏目漱石事典』(別冊国文学之〇36)学燈社、一九九〇年七月、二五七〜九頁)、および石崎等「漱石とベルクソン」[『文藝』三二(三)、一九九二年]を参照。佐々木亜紀子「『道草』のベルクソン——記憶の探究」[『愛知淑徳大学国語国文』三二、二〇〇八年三月]は『道草』における健三の記憶の態をベルクソンの『物質と記憶 (Matière et Mémoire)』(一八九六)の議論を踏まえ論じる。

(二三) 前掲注(二二)鈴木由加里「生命・生」、および宮山昌治

「大正期におけるベルクソン哲学の受容」を参照。

(二四) 西田は、昭和三年(一九二八)三月に刊行を開始した『普及版 漱石全集』(全二〇巻、岩波書店)の内容見本に掲載された推薦文で「夏目漱石氏は私の大学のあつた頃、一つの室で独逸語など教つたこともあるので、顔位は一寸知つて居る。併し無論さう話をしたこともなく、全く知らなかつた人と云つてよい」[『西田幾多郎全集』一一、岩波書店、二九九頁]と述べる。漱石と西田との間に直接の交友はない。

漱石と西田の思想的・哲学的立場の評価に関し相反する見解が並立する。例えば、思想史研究者の小林敏明『夏目漱石と西田幾多郎——共鳴する明治の精神』(岩波新書、二〇一七年六月)は、漱石と西田の生涯や思想の親近性を同時代の背景から探る。他方、ドイツ哲学研究者の望月俊孝は、両者の思想・哲学的立場の差異を強調する。望月は、西田はイギリスの哲学者ジョージ・パークレー (George Berkeley, 1685-1753) の「唯心論」に好意を示すのに対し、漱石の思考はイマヌエル・カント (Immanuel Kant, 1724-1804) の「批判哲学」に近いと述べる[『漱石とカントの反転光学——行人・道草・明暗双双』(九州大学出版会、二〇二二年九月、一八〜二二頁)]。本稿はこの問題に立ち入る用意はないが、両者の思想・哲学の類似と差異は改めて検討されるべき課題である。

(二五) 西田におけるベルクソンの受容について、藤田正勝『西田幾多郎——生きることと哲学』(岩波新書、二〇〇七年三月、五七～六〇頁)を参照した。

(二六) 『西田幾多郎全集』一、岩波書店、二〇〇三年三月、二五四頁。

(二七) 前掲注(二六)『西田幾多郎全集』一、二五五頁。

(二八) 前掲注(二六)『西田幾多郎全集』一、二五六頁。

(二九) アンリ・ベルクソン『思考と動き』原章二訳、平凡社、二〇一三年四月、二五四頁、傍点原文。

(三〇) 前掲注(二九)アンリ・ベルクソン『思考と動き』二五七頁、傍点原文。

(三一) 前掲注(二九)アンリ・ベルクソン『思考と動き』三〇八～九頁。

(三二) 丸山高司『人間科学の方法論争』勁草書房、一九八五年一月、一一～二頁。

(三三) M・H・エイブラムズ『鏡とランプ——ロマン主義理論と批評の伝統』水之江有一訳、研究社、一九七六年一〇月、一〇三頁。

M.H. Abrams, *The Mirror and the Lamp: Romantic Theory and the Critical Tradition* (Oxford University Press, 1971:1953), p.101. 原文に基づき、括弧内に英語を補記した。

(三四) 所謂「大正生命主義」研究の中で漱石の「生命」観も検討された。例えば石崎等「夏目漱石の生命観——〈命〉から〈生命〉」は、特に『それから』を取り上げ、ベルクソンの用語を援用しつつ、三千代という女性は代助にとって「創造的進化」と「生命の跳躍」への仲介者であると論じる(鈴木貞美編『大正生命主義と現代』河出書房新社、一九九五年三月)。大正生命主義について、他に鈴木貞美『「生命」で読む日本近代——大正生命主義の誕生と展開』日本放送出版協会、一九九六年二月)や、同『生命観の探究——重層する危機のなかで』(作品社、二〇〇七年五月)などを参照のこと。ただし漱石の「生命」観として本稿が提起したいのは、本論で示す通り文学理論としての「有機体論」の問題である。

(三五) 前掲注(一)『漱石全集』一四、二四三頁。

(三六) 前掲注(一)『漱石全集』一四、二五九頁。

(三七) 前掲注(一)『漱石全集』一四、二六二頁。

(三八) 『漱石全集』一五、岩波書店、一九九五年六月、二三六～七頁。

(三九) 前掲注(三八)『漱石全集』一五、四三九頁。

(四〇) 『漱石全集』二五、岩波書店、一九九六年五月、一九五～一九六頁

(四一) 前掲注(四〇)『漱石全集』二五、一九九～二〇〇頁。

(四二)『漱石全集』一六、岩波書店、一九九五年四月、二五五頁、
傍点原文。

心より感謝申し上げます。

※本稿は、二〇一九年度岐阜聖徳学園大学研究助成金を受けた。

(四三) G・N・G・オルシーニ「有機体論」『西洋思想大事典』
第四卷、平凡社、一九九〇年六月、四六一頁)。G.N.G. Orsini,
'Organism' including Philip P. Wiener ed., *Dictionary of the
History of Ideas: Studies of Selected Pivotal Ideas*, Vol. 3
(Charles Scribner's Sons, 1973), p.421. 原文に基づき、括弧内に
英語を補記した。

(四四) 同前。

(四五) イギリス・ロマン主義文学における有機体論について、岩
井茂昭「有機体論の概念史に関する予備的考察」『言語文化学会論
集』二七、二〇〇六年) および同「S.T. コウルリッジの芸術有機
体論と生命論」『近畿大学英語研究会紀要』一、二〇〇八年二月)
も参照。

(四六) 前掲注(三三) M・H・エイブラムズ『鏡とランプ』一七
五〜六頁。M.H. Abrams, *The Mirror and the Lamp*, p.176.

※本稿は、日本近代文学会東海支部・第六五回研究会(二〇一九年
一月一五日(日) 中京大学)の発表「夏目漱石の「文学の哲学」に
基づく。発表に際し多くの方々からご意見・ご批判を賜った。衷